

学 生 相 談 室 だ よ り



2023 年 12 月：松蔭大学 学生相談室

古い本になってしまいますが、沢木耕太郎「深夜特急(新潮文庫)」を読んだことがある人はいるでしょうか？この本は、沢木の個人的旅行体験に基づいて書かれた小説で、1986 年に刊行され、シリーズ累計 600 万部を超え、現在もバックパッカーのバイブルと呼ばれ読み続けられています。【ただバスを乗り継ぎながら 2 万キロ離れたロンドンまで行くこと】だけが目的の旅です。【ただロンドンにつく】だけのために、仕事を捨て、たった 1900 ドルをもって日本を出てロンドンに行きつくまでを描いた小説です。あらすじだけを読むと「馬鹿らしい」と思うかもしれませんが。しかしそういう馬鹿らしいことができることが【若さ】と言えるのかもしれませんが、その無意味なことがとても魅力的に思える一冊です。

現在、斎藤工が TBS ラジオでこの本を朗読しているのでこの番組を聞いた人もいるかもしれません。今から 30 年以上前に出版されたこの本が、くりかえしドラマ化されているのは、それだけこの本に魅力があるからではないでしょうか。実際斎藤自身、この本に影響され世界各地を旅行したという経験をもっています。私も大学時代にこの本を読み、まだ見ぬ世界への憧れに心をときめかせたものです。残念ながら、円安のこの時代、皆さんにとって海外はちょっと遠い存在になってしまったかもしれませんが、こうした本や動画から、日本以外の暮らしを味わってみてはどうでしょうか。

また、文化の違いというのは外国と接することでしか味わえないものではありません。日本の中にも無数の文化はあり、例えば世代や地域による文化の違いなどといったものもあります。円滑なコミュニケーションをするには、互いの文化を理解し、尊重することが大切です。

松蔭大学には、いろいろな先生がいて、世代が異なるので皆さんと違う視点をもっているのではないのでしょうか。単に年が離れていて、話しても面白くなさそう、と敬遠するのではなく、異なった文化と接するよう気持ちで、先生方にも話しかけてみてください。

学生相談室長 深谷野亜

海外旅行の体験

高校を卒業した後、大学進学のために予備校に通っていた。その時に、ロシアに団体旅行に行かないかとの話があった。祖母が、自分の夫(筆者の祖父)が亡くなった場所、ハハトイという村へ慰霊旅行に行くとのことで、これに同行するのである。予備校の事務の人は、せっかく成績が伸びているからやめた方がいい、と言った。しかし、海外旅行に行ったことのなかったので、俄然興味が湧いて、付いていくことにした。

日本の新潟空港からロシアのイルクーツクという場所の空港に到着し、初めての外国旅行が始まった。道中では、父親が元空軍パイロットで、筆者と年齢がほとんど変わらない通訳のアンドレが、流暢な日本語で引率した。彼はレストラン以外の生水は絶対に飲まないこと、ホテルからは外に出ないことなどを注意した。確かに、ホテルの風呂の蛇口の水は濁っており、お湯と一緒に小石が出てくるほどで飲む気にならず、また、その玄関やロビーには、拳銃を腰に差した私服の警備員が立っていて、ホテルの外がまるで無法地帯に思われた。さらに、ホテルの売店の脇には、ロシア・ルーブルの本日のレートを示した掲示板があった。

その他、この旅行ではショックを受ける場面はいくつも遭遇した。例えば、ロシアの指導者の首だけの巨大な彫刻に圧倒された。また、乗るはずの

異文化コミュニケーション学科 末次俊之

飛行機が、燃料節約のためとして我々の空港を通り越して行った。さらに、現地の人をお願いしていた仕事の費用を、我々のうちの一人が、帯のついたままの「米ドル」の札束で渡していたことも衝撃だった。

一方で、旅行に参加した中では筆者が最年少であり、その他の人たちの大半は 70 代後半以上、最も近い年齢の人でも 50 代だった。自分からすればおじいちゃんに当たる人たちが、「末次くんは彼女はおるんかね、ガハハ」などと気さくに声をかけてくれた。その中の一人が、目的地での最後の夜に、みんなの前で激昂した。「俺は戦友の骨を見つけるまで、帰らんぞっ」。その鬼気迫る姿が最も衝撃的だった。

旅行から帰ってきて、予備校の人が予想したように、成績は伸びなくなった。今考えれば、それまでの頑張り息切れしたのだと思う。それよりも、その旅行がシベリア抑留で亡くなった軍人・民間人のための墓参旅行であったということを、日々実感していった。戦後長い間、シベリア抑留に関して、調査や研究、遺族の墓参のために日本とソ連の両政府間で交渉がなされたものの、なかなか進展せず、物事が進み始めたのはソ連が崩壊してロシア連邦になってからだった。それから数年しか経ていない時期に、興味本位で参加したのが、この墓参旅行だったのだ。

1週間足らずの短い旅行のなかで、「国家が崩壊する」とはどういうことなのかを垣間見ることとなり、また「戦争に負ける」とはどういうことなのかを、抑留経験者の激高した姿から直に教えてもらった。過酷な環境で強制労働に従事し、亡くなった人々がどの場所に埋葬されたかは不明であり、彼らに明確な「墓」など与えられなかったのである。

海外留学のすすめ——個人的経験に基づいて

都内の大学の大学院博士課程2年生のとき、休学して9月から2年間、英国に留学する機会があった。オックスフォード大学では、「訪問学生」として受け入れられ、所属したリナカー・コレッジは19世紀女子修道院の建物だった。木造の階段は幅が狭く、同時に階段を使う人がいると踊り場で待ち、「先に相手を通してから」という譲り合うマナーを教わった。ドアを後ろの人のために押さえてあげる、などの譲り合いがごく当たり前の行為だった。学長(Principal)のバンパロー先生を学生たちは“Mr. Bam”と親しげに愛称で呼んでいた。木曜日はフォーマル・ディナーの日。スプーンでグラスをたたく音を合図に、Mr. Bamが厳かにラテン語で祈りを唱えたあと食事が始まる。食堂(Dining Hall)のベンチ(背もたれのない長椅子)に座った学生たちはガウンを着て、ワインを飲みながら談笑を始める。それ以外の曜日には、同じ食堂がカフェテリア(イギリス英語ではCanteen)になり、お祈りはない。このように日常的な生活の中で、formalとcasualを使い分けるのは私には初めてで、儀式的なものの持つ重みの魅力を実感した。

私は日本の標準では小さくないと思うのだが、みんなに“You're so small.”と言われた。コレッジ対抗のバンプ・レースは大学行事の一つ。私もやってみたくて、川辺に浮かぶ、一人で漕ぐ練習をするための一対のオールが付いた箱に座って試験を受けたが、体が小さく漕ぐ力が十分でないとのことで不合格だった。がっかりしていると、rowingのメンバーのマスコットになるのはどうかと言われて大満足。練習や試合のある時には、張り切って川まで応援にいった。また慈善金を集めるための、競技場を一周する競走(Charity Run)にテニス・ウェアで参加。他の学生たちは俊足で、私だけがコースに残ってしまったとき、一

この時の経験は、その後の筆者の物事に対する見方の原点となった。この貴重な体験の機会を与えてくれた、今は亡き祖母に感謝したい。

【略歴】コミュニケーション文化学部准教授。博士(法学)。専門は現代アメリカ政治。政治学。

異文化コミュニケーション学科 廣本和枝

人の学生がさっと私の横に来て最後まで伴走してくれた。その時にも「君は小さいからね」と言われた。6月にはSummer Ballと呼ばれる舞踏会が各学寮で開催される。男子はblack tie(蝶ネクタイ)のディナー・ジャケット、女子はフル・レングスで肩を出すドレスを着る。その頃町には、ショール、手袋、靴、ドレスなどが店頭には並び、専門店で絹のドレスを見つけた。小さなサイズに合うお客さんが少ないせいか、半額のバーゲンになっていて、店長の女性も「ドレスを着てもらえる人が見つかってよかった」と、にこにこしていた。そのドレスを着て踊り明かし、朝の6時まで残った学生だけが参加できる写真(survivors' photo)に臨むことができた。留学した時に接した人々のことを思うと、今でも心が温まり励まされる。(写真はSummer Ballのsurvivors' photo)。

【略歴】慶應義塾大学文学部仏文科卒業。学習院大学大学院博士後期課程を経て、松蔭女子短期大学英語科講師。現在、松蔭大学特任教授。



☆☆☆ 気軽に相談してください。メール相談も受け付けています ☆☆☆

学生時代は悩みが多く、将来のことにも不安をいだくことが多いと思います。たとえば「友人、異性あるいはサークルのことで悩んでいる」「緊張しやすく、思うようなことができず困る」「不安やイライラで気分がすぐれない」「自分の性格とか外見とかが気になる」「学業や進路のことで戸惑い、困っている」「先生とうまく関われない」など、どんなことでも構いません。気軽に相談してください。相談をすることで、ありのままの自分を理解し、その自分を生かしながら生きていけるよう願っています。相談時間ならびに担当者については、大学の掲示板・HPで確認してください。